

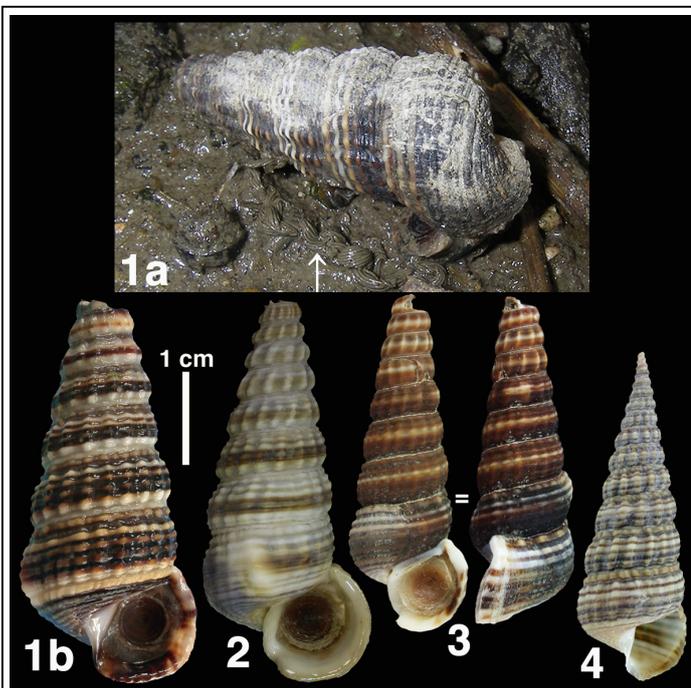
フトヘナタリ *Cerithidea moerchii* (A. Adams in Sowerby II)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息し、特にヨシ原群落内に高密度で生息する。県内ではヨシ原湿地という生息環境自体が護岸工事や埋め立てにより著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。県内のヨシ原湿地が良く保全されている河口域には健全な個体群が認められるが、ヨシ原湿地が完全に消失すると本種は生息できなくなる。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。

【形態】

殻長約 40 mm の円筒形で、殻頂部分は成長にともなって欠落する。殻表は粗い布目状で殻口は反転して肥厚する。幼貝(図 4)では殻頂が保存され、殻口は肥厚せず、殻の外見から受ける印象は大きく異なる。蓋は円形で革質。殻の大きさは、県内でも生息地によって変異がある。庄内川河口の個体群(図 1, 2)は、殻が大きく、殻質が厚い。



1, 2: 1a ↑卵囊, 名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 3: 矢作川河口, 2017年6月22日, 4: 幼貝, 宝飯郡佐奈川河口, 1994年8月1日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在約 20 カ所である。現在でもヨシ原湿地が残されていれば、かなりまとまった個体数が生息しており、特に三河湾汐川干潟では大きな個体群が残っている。庄内川河口の個体群は護岸工事等で著しく減少していた(木村, 2004)が、近年回復傾向が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋、国内では東北地方～九州、南西諸島に分布する(木村・福田, 2012)。イトカケヘナタリは、南西諸島に分布する小型の地域個体群である(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地、特にヨシ原群落内に多く生息する。夏に底質上に泥で固めた紐状の卵囊(図 1a の矢印)を産む。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.  
木村昭一, 2004. 名古屋市より採集されたフトヘナタリの生貝. かきつばた, (30): 34-35.  
木村昭一・福田 宏, 2012. フトヘナタリ, p. 29. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)